

帯広の花には驚かされる。秋桜（コスモス）と紫陽花が同時に咲いている。季節感が狂ってしまいそうだ。

さて、花といえば、帯広駐屯地を上空から眺めると十勝飛行場周辺に、黄色い花が今を盛りと咲き誇っている。ジョギングついでに確認すると、セイダカワダチ草と名の解らない黄色い花だ。パソコンで黄色い花で検索してみると、「東郷菊」に似ている。然しながら、飛行場の花と比較してみると、舌状花の数が異なり、茎の色も異なる。東郷菊もどきとも称するべきか。折角の機会であるので、東郷菊についても調べてみた。東郷菊のような由緒ある花が野生化し群生している筈もなく、早とちりで残念なり。



(アラゲハンゴンソウ)

I 背高泡立草

セイダカアワダチ草について調べてみると面白い事が解った。セイダカアワダチ草は、北米原産の菊科の植物で、観賞用に移入された帰化植物である。花を酒を醸造する時の泡立ちに見立て、更には背も高いので、背高泡立草と書く。草木染にも使われ、花粉症の一因ともなっている。

多年草で地下茎によって繁殖する。セイダカアワダチ草は、戦後日本を席卷したが、最近では其の勢いも弱まっている、激減しているともいわれている。

増殖・激減の理由が面白い。この草は、地下茎から毒素を出し、他の草を寄せ付けず一つの株が3年間で10数㎡の土地を占領してしまう。この様に、自身の種の保存・勢力拡大の為に多種の生育を阻害してしまうのである。ところが、セイダカアワダチ草が増えすぎると、この毒素が、自身にも影響を及ぼして生育阻害を齎し、衰退に向かう。

奢れる者は久しからず、栄枯盛衰だ。己の増殖の為の手段が、己自身を滅ぼしてしまうことになるという大いなるパラドックスを抱えている。

II 東郷菊

東郷菊の特徴は、直径3センチ程の黄色の花真中に「真っ黒な花芯」があることである。ヨーロッパ北部を原産とするこの花の日本移入の由来が面白い。時は、明治44年2月、英国のエドワードVII世の戴冠式に出席された小松宮彰仁親王に随行した東郷平八郎元帥が、英国のキュー植物園から種をプレゼントされ、日本に持ち帰った。元帥はその種を親交のあった向島百花園主に寄贈した。学名は、ルドゥベギア・フルギダとするこの花に百

花園主は「東郷菊」と命名したという日くつきの花である。

(<http://www2u.biglobe.ne.jp/~bokutei/tougougiku.htm>)

東郷元帥といえば、日露戦争でロシアのバルチック艦隊を日本海海戦（1905年5月27,28日、因みに戦前5月28日は海軍記念日である。）で打ち破った日本を代表する提督である。フィンランドには、東郷平八郎元帥の肖像を貼った「トウゴウビール」があるといわれ、フィンランドが親日的だとする証左とも言われたりしている。が、それはトウゴウビールではなく、世界各国の提督の肖像がラベルになった「提督ビール」の一つだそう。その提督ビールが、かつてフィンランドに存在したのは事実である。最近になって復刻版が出たと言われている。

東郷菊もどきの黄色い花の名前が解った。荒毛反魂草（アラゲハンゴンソウ）という菊科の花で、北米の原産種である。舌状花は、8～14個である。葉の形が人が手を広げたようで、死人の魂を呼び戻すように垂れ下がっていることから反魂草との名前がついた。管状花(筒状花)は黒褐色である。明治時代以降に日本に入り、庭で栽培されていたが、現在では各地で野生化している。別名、衣笠菊といわれる。オオハンゴン草との差は、筒状花の色の差であり、オオハンゴン草は黄緑色である。

帰化植物は強いというのが実感だ。

(百科辞典、植物図鑑、各種HP、etc)